

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第16回 全国大会プログラム

日時：2016年11月26日（土） 10:00～18:00

場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

★研究発表（10:00～12:25）

※ 第一発表（10:00～10:45） 第二発表（10:50～11:35） 第三発表（11:40～12:25）

第一室（116室）

司会：千葉工業大学 浜野志保

1. J・バステアン＝ルパージュとJ・W・ウォーターハウスの作品における身体の「外化」
—ヴィクトリア朝のガラス文化と写真、絵画

筑波大学（院） 山口 茜

2. ジュリア・マーガレット・キャメロンの写真とラファエル前派主義

県立広島大学 吉本和弘

3. T・H・ハクスリーの宗教信仰

司会：岡山大学 小田川大典

釧路公立大学 藤田 祐

第二室（117室）

司会：大阪大学 橋本 順光

1. ラザフォード・オールコックの文化観と英国の日本趣味
—1862年第2回ロンドン万国博覧会を通して

筑波大学（院） 濱島 広大

2. ウィリアム・モリスの北方趣味とデモクラシー

神戸大学 清川 祥恵

★シンポジウム（134室、13:45～16:30）

ヴィクトリアニズムとモダニズム—分断と継承

司会：日本女子大学 川端 康雄

パネリスト：成城大学 木下 誠

法政大学 荒川 裕子

studio-L 代表、東北芸術工科大学 山崎 亮

★特別講演（134室、16:40～17:40）

ヴィクトリア朝の人びとと投資文化

司会：京都大学 小関 隆

大阪経済大学 坂本 優一郎

★総会（134室、17:45～18:00）

司会：日本女子大学 佐藤 和哉

★懇親会（18:00～20:00）

会場：茗溪会館

【研究発表】

(第一室)

J・バスティアン＝ルパージュとJ・W・ウォーターハウスの作品における身体の「外化」 —ヴィクトリア朝のガラス文化と写真、絵画

筑波大学(院) 山口 茜

I. アームストロングが *Victorian Glassworlds* (2008) でヴィクトリア朝は Public Glass の時代だと論じたように、この時代、人々の身体は街中に溢れたガラスに映し出されて「外化」し、他者の視線に無制限に晒されるようになった。このガラスに映し出される新しい身体イメージは、芸術家の関心を集めたと考えられる。《南のマリアナ》、《エコーとナルキッソス》等、多くの作品で水面や鏡を描いた J. W. ウォーターハウスもその一人であり、彼のガラスへの関心は、レンズと鏡を内蔵したカメラが写し出す写真にも向けられた。同時代にロンドンで活躍した画家 J. バスティアン＝ルパージュは『サルペトリエール写真図像集』に掲載されていたヒステリー患者の写真を利用したが、ウォーターハウスの狂気の女性像にはその影響がうかがえる。本発表は、ウォーターハウスが描いた鏡と水面に映る身体、そしてヒステリーの表情を、ガラス文化が生んだ身体の「外化」の表現として捉え、考察を試みる。

ジュリア・マーガレット・キャメロンの写真とラファエル前派主義

県立広島大学 吉本 和弘

ラファエル前派の絵画の特徴の一つである細密な現実描写に、発明間もない写真術の描写力の影響が強く見られることはしばしば指摘されている。一方で、技術的にも発展途上で、芸術としての地位を認められていなかった写真術はラファエル前派のナラティブ・ペインティングの要素を導入あるいは模倣して、画面に物語の演出を施す方向に向かった。このような影響関係を示す一つの例として、挿絵の代わりにジュリア・マーガレット・キャメロンが撮影した写真を貼り付けた詩集で、アルフレッド・テニソンの手書き版 *Idylls of the King and Other Poems* (1875) がある。挿絵となったキャメロンの写真に見られる演出や撮影技法を検討することを足がかりに、文学的テーマを持つ他の作品にも言及しつつ、ラファエル前派主義をめぐる写真と絵画、そして文学の関係性について再考してみたい。

T・H・ハクスリーの宗教信仰

釧路公立大学 藤田 祐

T・H・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825–1895)は、キリスト教に対抗して科学の世俗化を推し進め、「科学対宗教」という図式において科学の立場を体現する人物だとみなされることが多い。一方で、ハクスリーを対象とした学術研究においては、ハクスリー思想の宗教性も含めてハクスリーの宗教に対する考え方が議論されてきた。そこでは、ハクスリーの立場を表す「agnosticism」(「不可知論」)や「scientific naturalism」(「科学的自然主義」)が、単純に宗教と対立する理念と捉えられるのではなく、宗教信仰と関わる観点から分析されている。本報告では、先行研究における論点を整理して晩年に至るハクスリー思想の概要をふまえた上で、1890年前後に展開されたハクスリーの言論活動に焦点を合わせてハクスリーの宗教信仰という問題について考察したい。

(第二室)

ラザフォード・オールコックの文化観と英国の日本趣味 —1862年第2回ロンドン万国博覧会を通して

筑波大学(院) 濱島 広大

1862年の第2回ロンドン万国博覧会の日本部門では初代日本総領事兼公使ラザフォード・オールコックが自ら日本で収集した品が展示された。展示に関してオールコックは御用絵師の作品のような最高級の品ではなく生活雑貨や民芸品を選定した。展示された品は英国人の生活様式に影響を与え、英国独自の日本趣味を生んだが、そのような日本趣味をもたらしたオールコックの展示品選定の理由・方法は明らかにされてこなかった。しかし、オールコックは展示品の収集状況や背景を記録している。本発表ではこの記録を追跡し、彼の展示品収集の状況を幕府との関係も踏まえて詳らかにし、彼の日本部門の監修意図を明らかにする。これにより、当時の人類学的・進化論的関心に

基づく文化観と比較し、日本とヴィクトリア朝の生活文化とを接続したオールコックの文化観に迫る。以上より、日本部門での「生活文化」の展示がいかに関英国特有の日本趣味を生んだのかを明らかにする。

ウィリアム・モリスの北方趣味とデモクラシー

神戸大学 清川 祥 恵

ウィリアム・モリスの社会主義思想と芸術思想にかんしては、従来おおくの言及がなされてきたが、近年彼の「北方」趣味が、この二者に架橋するものとして注目を集めつつある。社会主義運動を活発化させる 1880 年代に先立つこと 10 年、モリスはアイスランドを二度訪問しており、同地での体験は、晩年にかけてのロマンス制作にさいしても、直接的に反映されている。本発表では、モリスがアイスランド社会に見いだしたとされている「デモクラシー」を題材とし、ヴィクトリア時代の北方趣味の流行のなかで、モリスがどのような影響を受け、いかなる社会観をはぐくんだのかを明らかにする。同時に、ドイツ思想の系譜や反ローマの象徴として意義を持っていたというよりはむしろ、理想的な「過去」の表現であった「北方」世界を、とりわけ文学作品において、モリスがどのように今日の問題と接合し、自らの社会の理想として表現しているのかについて検討したい。

【シンポジウム】

ヴィクトリアニズムとモダニズム—分断と継承

司会：日本女子大学 川 端 康 雄
成城大学 木 下 誠
法政大学 荒 川 裕 子

1920 年代の中世主義的モダニズム—協働の継承に向けて
唯美主義とモダニズムのあわいで

コミュニティ・デザインがヴィクトリア朝英国から学んだこと

studio-L 代表、東北芸術工科大学 山 崎 亮

20 世紀前半、第一次世界大戦を境にして、ヴィクトリア朝の文化的産物は(特に知識層のなかで)かなり評判が悪くなり、代わってモダニズムが盛期を迎える。思想運動や芸術運動の常として、自身の独自性を打ち出すために、先行する運動体と自身との差異をことさらに際立たせようとする傾向はたしかにある。「モダニズム」対「ヴィクトリアニズム」という対立図式もこれに入るわけだろう。時がたち、見晴らしの良い地点に立って過去をふりかえったときに、狭義の「モダニズム」の当事者たちの自己演出と、前世代の思潮からの断絶の身ぶりが相対化され、それまで気づかずにいた類似点に目がむけられるようになった。ヴィクトリア朝時代の文芸思潮と 20 世紀「モダニズム」の連続性に注目する、見直しの試みが増えてきた。

このシンポジウムではそうした連続性に力点を置き、ラファエル前派の美学、唯美主義運動、あるいはジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの芸術思想など、モダニズム期以降に「残滓」として片隅に追いやられたようにみえたヴィクトリア朝の「遺物」が、かたちを変えてさまざまな場所で継承されていった次第を確認し、それらの「遺物」を今日どのように生かすのか、その可能性を検討したい。

【特別講演】

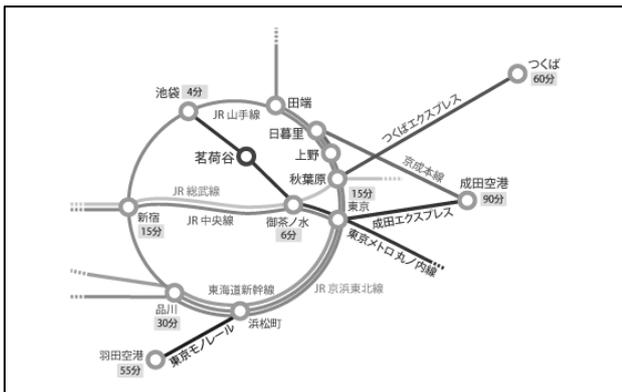
ヴィクトリア朝の人びとと投資文化

司会：京都大学 小 関 隆
大阪経済大学 坂 本 優一郎

もし近代社会が、投資の原理をビルト・インした社会、すなわち「投資社会」であるとするならば、ヴィクトリア朝下の英国社会は「投資社会」の典型といえるかもしれない。というのも、そこでは、富める者も貧しき者も、階級や男女の別なく、年齢を問わず、債券や株式への投資に直接・間接にかかわるようになったからである。同時に「投資社会」は、ヴィクトリア朝の人びとに投資や投機の手段を与えただけではなく、チャリティなどさまざまな組織に基本財産の保全・継承手段をもたらすことで、組織や社会が継続的に存立しうる基盤をも提供したと考えられる。この報告では、ヴィクトリア朝の社会を「投資社会」とみなしうるのか否かという根源的な問いから出発し、もしそういえるのであれば、それに呼応するような「投資文化」なるものが認められうるかを検討する。ヴィクトリア朝の人びとにとって投資なるものがどのような意味をもったのかを考えてみたい。

*会員以外の方の参加も歓迎いたします（無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費をお支払い願います）。

筑波大学東京キャンパス文京校舎アクセスガイド <http://www.tsukuba.ac.jp/access/bunkyo_access.html>
(地下鉄丸ノ内線茗荷谷(みょうがだに)駅下車「出口1」徒歩5分程度)



日本ヴィクトリア朝文化研究学会
(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：東京都文京区目白台 2-8-1
日本女子大学文学部英文学科
佐藤和哉研究室内
Tel: 03-5981-3560/Fax: 03-5981-3549
E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com